かえ、シートンもかつてその宮廷にいた。公のお気に入りの錬金術師ヨハン・ミュラー・フォン・ミューレンフェルスJohann Müller von Mühlenfelsは、おそらく公と結託してセンヂヴイの秘密の粉末を手に入れるため陰謀を企てた。センヂヴイは城の塔に幽閉され、彼の粉末を納めた箱をはじめ貴重な所有物はすべて没収された。センヂヴイは(おそらく監禁者側の念入りな仕掛けにより)脱走して、自分の災難をルドルフⅡ世とズィグムントⅢ世に訴えた。公はその圧力に屈し、陰謀の元凶ミューレンフェルスは裁判にかけられ絞首刑に処せられた。

これらの事件の後、センヂヴイはポーランドに帰り、錬金術に異常な関心をもっていたズィグムントⅢ世の信頼を得て王室秘書官となり、錬金術の研究に専念した。ヤン・マテイコは、センヂヴイが王の前で錬金術の技を示している場面を描いている。

錬金術師センディヴォギウス
Jan Matejko（1838-93）画、1867

しかし時とともに王との関係は冷えこみ、センヂヴイはヴォルスキから資金援助を得てその領地クシェピツェ Krzepice(チェンストホヴァの西北)に実験室を建設し錬金術の研究を続けた。金製造の成果は見られなかったが、彼の研究は中央ヨーロッパにおける冶金工業、化学工業の基盤を築くことになった。

その後センヂヴイはポーランドを去り、神聖ローマ帝国の新帝フェルディナントⅡ世(在位 1619–37)の顧問官となり、ウィーンとワルシャワとをつなぐ外交官的な働きをし、またシレジア(シロンスク)における皇室用の銅、鉛の採鉱場の建設を指導した。皇帝に尽くした政治的貢献によりクルノフ公爵領に領地を下賜され、クラヴァジェ Kravaře(現在のチェコ共和国東端)に住み、1636年そこで世を去った。

センヂヴイはペテン師的な錬金術師ではなく、硝石が加熱される時に放出される酸素の存在に最初に気づいた化学者として評価されている。

当時の中欧の支配者たちはセンヂヴイに金を創り出す夢を託したが、彼の故郷ポーランドのノヴィ・ソンチの町民は、今も黄金出現の見果てぬ夢を見る。毎年、大晦日の深夜、大学教授の講義用ガウンに身をつつんだセンヂヴイは、ノヴィ・ソンチの旧市街を悠然と歩きながら自分のまわりに金貨を振りまく。地面に落ちる金貨の音は聞こえるが、錬金術師の姿は月夜にも影を落とさない。センヂヴイの亡霊を見た人は幸運に恵まれた素晴らしい年を迎えるという。

(くりはら しげお)

“Grill”シーズン

近ごろポーランドでは、五月から夏の終わりにかけて“grill”をするのが流行っています。“Grill”は“バーベキュー”を意味する新しい外来語です。親しい者同士が庭に集まり、食べたり飲んだりしながら、暗くなるまで語り合います。私たちもイエズス会の神父さんたちから修道院の中庭での“grill”に招待されました。

w skwarze południa　　**灼ける午後**
nad koszem z owocami　　**果実の篭に**
latają osy　　**飛ぶ蜂や**

ポズナン市、津田モニカ
Monika Tsuda, Poznań

dźwiękami grzmotu　　**かみ鳴りと**
deszczu i wiatru śpiewem　　**風雨の歌で**
gra nawałnica　　**嵐奏(ひ)く**

ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ
Piotr Wrzeciono, Warszawa

年寄れば少し丁寧花を見る
暗闇にをんな差し出す冷奴
雁帰る人生軽みカルパッチョ

岩見沢市、霜田千代麿

ポーランド&ニッポン歳時記

ポーランド&ニッポン歳時記

除夜の鐘聞かず今年も年明ける
雪しづり夢まぼろしの蝦夷地かな
つぶやくは蕪村の一句春の月

岩見沢市、霜田千代麿

カルメル会研究所

ポズナン市の「聖ヴォイチェフの丘」にあるカルメル会の研究所と関わり始めて、4年目です。修道院の古い内装にもすっかり慣れました。ここに集まる面白い人々と一緒にいるのは、気分のいいものです。そして、地下室の明かり窓の下にあるヒーター脇の自分の席も気に入っています。ある時などは、蜘蛛ともその席を共にしました。

klasztorne mury
przenika chłód wiosenny
modlitwa w ciszy

沈黙や
カルメル会の
春寒さ

ポズナン市、津田モニカ
Monika Tsuda, Poznań

poranna podróż
za oknami pociągu
mgła w słońcu znika

朝陽出て
車窓の向こう
靄消える

ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ
Piotr Wrzeciono, Warszawa

短く自己紹介——ピョトル・ヴジェチョノ

私の俳句を掲載していただき、本当にありがとうございます。出版されたものは私にはとても重要ですし、この文学形式でのこれからの作業のモチベーションともなってくれます。

貴協会と会誌「ポーレ」のことは、長いお付き合いの津田夫妻から知りました。普段は情報学、もっと詳しく言えば、いわゆるMIR (Music Information Retrieval)に携わっています。ポズナン市の出身で、現在はワルシャワ生命科学大学 SGGW の応用情報学・数学部で准教授として働いています。

自然科学のほか、私にとってとても重要なのは、人文科学、特に音楽です。私が主に演奏している楽器はパイプオルガンですが、MIR 分野での研究対象はバイオリンです。

初めて俳句と出会ったのはまだ高校生のときで、それはチェスワフ・ミウォシュがポーランド語に訳した俳句と、自らポーランド語で作った俳句でした。

日本文化に興味を持ちはじめたのは、ポズナン工科大学での学生時代でした。主な刺激となったのは、宮崎駿の映画『千と千尋の神隠し』でした。それはとても感動的な体験で、中でも久石譲の作曲した素晴らしい音楽が大きな役割を果たしました。

ポーランド日本協会ヴィエルコポルスカ支部で日本語を勉強しはじめ、日本の文化を知るようになりました。協会の授業で、俳句という文学形式、しかも今度はそのオリジナル版に興味を持つようになりました。俳句は私にとって自らの詩を作るためのインスピレーションとも、誘いともなりました。

ポズナン工科大学を修了したあと、ワルシャワのポーランド日本情報工科大学で博士課程を始めました。ここでも私の日本への興味が広がり、さらに自分の学術研究でも日本の学術刊行物を利用し始めました。

句作は、もっとも相応しい言葉を探す出会いです。形式は、わずか十七音だけからなるのですが、その中でとても多くのことを伝えられます。さらに俳句は、単なる言葉のみではなく、メロディでもあります。俳句を作るときには、何を伝えたいかに加えて、その詩の響きについても考えるようにしています。

《新会員のひと言》

松山　敏と申します。

札幌に住み着いて30年を超えましたが、このような素晴らしい活動を今更ながら初めて知る事ができました。

日本福音ルーテル札幌教会にて日頃から御厚情を頂いております栗原ご夫妻からのお誘いで、北大構内のクラーク会館国際文化交流活動室のドアーをくぐったのは2015年6月のことでした。

朗読会「午後のポエジア」という催しでした。作者の創意が頂点に達した瞬間、執筆者の手元を離れて一人歩きしながら世に溶け混んで消え去ろうとする文章作品が、朗読するパフォーマーの手によって実にパワフルに復活する様は、作曲者が書いた譜面を様々な演奏者の情念によって全く違った色のサウンドとして再び世に放たれるエネルギーと同質のものであると、深い驚きと感動を覚えたものです。

その次は、時計台の二階ホールでのピアノ演奏会でした。主に札幌で活躍されている演奏家たちがこぞってショパンと言う人類共通の感動の壺に集められて鍵盤をかき鳴らし、遥か遠いポーランドの空気感を取り込み、札幌時計台の時刻を超えてサウンドして私たちの心の隔たりを無に至らしめる。

朗読会、音楽会のいずれにおいても、もろもろの国民、種族、民族、国語を超えた民の中から集められた子供や大人たちが、聞こえて来る清らかなパッションに耳を澄ましている。

その中に溶け込んで、私も子供達と同じように、I listen to hear the sound of righteousness.

日頃の世俗のビジネスの混沌とは確実に隔てられ、溢れ出る喜びの涙に濡れ、ダイナミックな光に溢れたパワフルな世界を愛する皆様方の中に共に新たに迎え入れられているという現実的な出来事に対して、言葉の語源にある真実な事に迫る大きな至福に満たされております。　（まつやま・さとし）

はじめまして。國谷聖香と申します。

この度、松井亜樹先生からのご紹介で、北海道ポーランド文化協会に入会させていただくことになりました。私は大学ではピアノを専攻し、主にショパンの曲に取り組んで来ました（卒業試験はショパン作曲ピアノソナタ第三番全楽章を演奏致しました）。憧れの作曲家の故郷ポーランドの文化を学べるまたとない機会をいただき、とても感謝しております。

以前、ウィーンからプラハへ向かう列車「ドボルザーク号」に乗った時、隣の線路にワルシャワ行き「ショパン号」が待機していました。列車の名前に作曲家の名前が使われるヨーロッパの芸術への深い理解と愛情に感動するとともに、目の前にいるショパン号が向かう線路の先にあるポーランドという国へ想いを馳せたことを覚えています。

その気持ちを胸に、素晴らしい作曲家を生んだポーランドの文化や芸術、音楽教育を学ばせていただきたいと思っています。　（くにや・せいか）

ショパンな十月　ショパン・コンクールが終わりました。街に行っても、公園に行っても、音楽に付き添われているような毎日でした。そのため、今年の十月は特別でした。次の五年間聴くことのできないコンクールだから、なおさらです。

z cichym szelestem
pierwsze liście opadły
mozaika dźwięków

さらさらと
音のモザイク
初落ち葉

ポズナン市、津田モニカ

światło latarni
tka obłok mgły wieczornej
powrót do domu

街灯の
濃い霧を織る
家路かな

ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ

ポーランド&ニッポン歳時記

革命歌10月17日のショパン曲
（10月17日・ショパン命日）
岩見沢市、霜田千代麿

忘却の海を眺めて多喜二の忌
（小林多喜二）
（北村牧場チエ・由起・千寿子）

開拓の女三代冬むかえ

にポーランドに姿を現した二人が帰国した後の「おい、辞書を作るぞ。帰って来い」の一言がなかったなら、さて、三十過ぎまで、学年末試験の恐怖に怯えながら、しかしその一方で、生まれて初めて知った学問の面白さに、憑かれたように学んだポーランド・スラヴ文献学を、とにもかくにも日本で役立てることが出来ただろうか。

しかもこれは決して私のケースが特別なわけではない。さまざまな分野の優秀な若手研究者を“発見”し、ポーランドの魅力の虜にさせ、今日の日本のポーランド学の担い手を数多く育成した吉上昭三氏にはまさに“フィクサー”の名が相応しいかもしれない。もしポーランドと日本の今日の付き合いが、他人行儀でない、相互の深い人間的信頼を基礎にしたものになっているとしたら、日本学研究者だけでなく、すべてのポーランドの友人への吉上昭三氏の変わることない愛情と二つの遠い国々の人々の時空を超えたユートピアへのロマンチストの夢のおかげであろう。その突然の悲劇的な死は、「ポーランド文化の現在・過去・未来」と銘打った個人雑誌『ポロニカ』(年刊)の発行(「十巻は出さなくちゃ」と言っていたが、第五号が最終号になってしまった)も、新しい時代のポーランドと日本の交流の基盤にしようとしたポーランド財団の夢も志半ばで断ち切ってしまった。

ポーランドを知らなくとも、子供の頃、内田莉莎子さんが翻訳・紹介したポーランドの児童文学や絵本を一度も手に取ったことがない日本人はいないに違いない――あの病弱な体のどこにあれほどのエネルギーが秘められていたのだろうか。戦後のポーランドの絵本のほとんどを、誰もその右に出る者がない、あの天性の内田魯庵譲りの見事な日本語で紹介し続けた莉莎子さんも、吉上昭三氏の死の一年後、後を追うように他界した。「いやあ、僕も疲れたよ」――突然の悲劇の数日前の、いつもの長電話の中での述懐。人生のすべてを託していた夫の思いも寄らぬ葬儀の日の、入院中のベッドから抜け出してきた莉莎子さんの気丈な表情。

もう吉上夫妻のように謙虚に、しかし無私の情熱でポーランドを愛することは誰にも出来ないかも知れない。その情熱に惹き付けられた無数の人々がいた。後にチェコ語の専門家であるにも拘わらず、チェコ語科よりもポーランド語科に優位を与える形で、当時の学長だったロシア文学の碩学原卓也氏(1930–2004)とともに東京外国語大学への両学科設置を実現することになる千野栄一先生(1932–2002)もそのひとりだろうか。（つづく）

（こはら・まさとし、1940 年福島県生まれ。執筆当時(1999 年6月)、東京外国語大学ポーランド語専攻教授。本稿はワルシャワ大学刊の JAPONICA 12/2000 に Henryk Lipszyc, Romuald Huszcza 両氏によるポーランド語訳が掲載された。）

写真：吉上・内田ご夫妻（栗原朋友子さん提供）

ポーランド & ニッポン歳時記

身の隠し場所　近所の家では二階を増築しています。辺りは埃と騒音でいっぱい。さらにお隣さんもリフォームの最中です。実際、ポーランドの夏休みと言えば、旅行かリフォームの季節です。隠れ場所がありません。

zmęczeni słońcem　陽に疲れ
skrawka zieleni szuka　緑を探す
mała dżdżownica　ミミズかな
ポズナン市、津田モニカ

burza minęła　嵐過ぎ
nad leśną dróżką stoi　森の小道に
brzozowa brama　樺の門
ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ

夏の雷女房逃げれば猫までも
（雷―三夏）

むらさきの花何のはな芋の花
（芋の花―仲夏）

ラベンダー果ててピエロの悲しけり
（ラベンダー―初夏）

岩見沢市、霜田千代磨

北海道ポーランド文化協会　第73回例会

Concert

～ピアノで奏でるポーランド～

2015年6月30日（火）

開場　18:30　開演　**19:00**

時計台ホール（中央区北1西2）

TEL（011）231-2838

入場料：1,000円

お話／薄井豊美

ピアノ演奏／安藤むつみ，高島真知子，名取百合子，横路朋子

プログラム／ボンダジェフスカ：乙女の祈り，パデレフスキ：メヌエット
モシュコフスキ：愛のワルツ，ポーランド舞曲 Op.55 より
ショパン：ワルツ第7番 Op.64-2，ポロネーズ第3番「軍隊」，ノクターン Op.9-2，
幻想即興曲 Op.66，バラード第4番 Op.52，四手のための変奏曲ニ長調

協賛：ポーランド広報文化センター　後援：札幌市・札幌市教育委員会

♫「乙女の祈り」関連記事（7ページ）もご参照ください。

※ 詳しくは同封のフライヤーをご覧ください。

dawny sklep rybny　魚屋の
drzewo wiśni zakwitło　終うも知らぬ
również w tym roku　桜かな

津田 モニカ（ポズナン）

近所の角に、かつて魚屋だった建物が残っています。先日、ある老婦人が寄ってきて、この魚屋のことを尋ねました。私は、店が閉じてしまったことを教えなければなりませんでした。悲しそうにしていました。私の方は、団地の真ん中に大きなスーパーマーケットが出来て、便利になったにもかかわらず、小さな魚屋がなくなったことを残念がっている人がまだいるのを見て、心強くなりました。

wiosenny księżyc
pod cieniami ukryty
odgłosy ptaków

鳥の声
影で隠した
春月夜

ピョトル・ヴジェチョノ

Piotr Wrzeciono 情報科学研究者。ワルシャワ勤務。学生時代から日本文化に興味を持ち、2003 年から俳句を詠む。「一瞬を眺める」がモットー。

新春の今・ポーランド如何ならん
津田君の雪の読書はチェーホフか
花こぶし空に希望のある如し

霜田 千代麿（岩見沢）

ポーランド ＆ ニッポン歳時記

交問題になりますからね」「…わかった…了解！」
　そしてヴロツワフの国際青年演劇祭では“テンジョウサジキ”というポーランド語が出来てしまった。
　終演の次の日の午後、ヴロツワフ中央駅から、パリー東駅行きの汽車で“天井桟敷”の一団は正に“台風一過”のすさまじいカルチャーショックをポーランド各地に残して去って行った。

―九條さんのこと―

　ある年の国際寺山修司学会で、久しぶりで再会した。ポーランド以来3度目である。飲み物が置いてある控室には誰もいなかった。紙コップを持ち、春日（はるび）射すベランダへ出た。

　僕は思い切って彼女にこう質問した。「今頃、あのような本が出るのは、いかがなモノなのでしょうか？」それは、永年アムステルダムに住んでいた田中未知氏の帰国後まもなく出版された『寺山修司と生きて』という、三角関係を思はせる本の事であった。

　すると九條さんはこう言った。「アノネ、霜ちゃん、寺山修司を愛した女はあまたいるのヨ…だけどね、寺山修司が愛した女は私一人よ！」キゼンというより、僕の目を見て諭（さと）すように言った。ベランダは五月の光の中にあった。

　ご逝去の報に接し、心より哀悼の意を表します。　合掌。

※ 筆者は国際寺山修司学会の『寺山修司研究』にエッセイを連載、今春（2014 年 4 月）第7号発行。
※ 本稿は「プレス空知」（2013 年 8 月 28 日）を改稿
※ 九條今日子（寺山映子）氏、平成 26 年 4 月 30 日永眠（享年 78）
※ 写真提供：㈱テラヤマ・ワールド

〈連載俳句〉

ポーランド ＆ ニッポン歳時記

　秋です。俳句を詠みはじめたのは、秋でした。秋には、新学年、つまり私と夫にとっての一年の仕事も始まります。また、お隣さんから新しい生命が宿ったことを聞かされたのも、ちょうど秋のことでした。

jesienny powiew
nitka twojego życia
w kilimie świata

〈ポズナン市、津田モニカさん〉

くずあんをかけていただく蕪蒸
冬十二月（蕪蒸（かぶらむし）―かぶのむしもの）
モニカ

青女乗る蝦夷の炭住ブリキ屋根
冬十二月（青女―霜のこと）
千代麿

みむらさきたのしきときのみじかけれ
秋十月（実むらさき―紫式部の実）
モニカ

秋風にとぶ糸　生きる錦かな

投稿（俳句、短歌、川柳など）歓迎―事務局へハガキで

〈岩見沢市、霜田千代麿さん〉

今後の活動予定

〈第 70 回例会〉ヤン・カルスキ生誕 100 周年記念展示会「私はホロコーストを見た――ヤン・カルスキの黙殺された証言」

日時 ： 10 月 27 日(月)～11 月 9 日(日)
(月～土)8時 45 分(初日は 12 時)～22 時
(日・祝)8時 45 分～20 時(最終日は 16 時)
場所 ： 札幌エルプラザ 2F交流広場
(北区北 8 西 3、JR 札幌駅北口地下歩道 12 番出口直結)
内容 ： ポスター(写真と解説)等
※ 同封のフライヤーをご覧ください

〈第 28 回定例総会＆懇親会〉

日時 ： 10 月 31 日(金)
18 時 30 分(懇親会 19 時 30 分～)
場所 ： 北海道大学クラーク会館 3F
国際文化交流活動室
懇親会会費 ： 3000 円(予定)

新会員をご紹介します

大塚広介さん、古屋郁子さん(2名)

ご寄付ありがとうございます

感謝をもってご芳名を掲載いたします。
佐藤宣子(3)
※( )内は口数:1 口千円、敬称略

《重要》年会費納入のお願い

10 月から新年度を迎えます。
2014 年 10 月～2015 年 9 月分の年会費(3000 円、学生 1500 円)、および維持会費(任意のご寄付:1 口 1000 円以上)の納入をお願いします。
本会の活動は皆様の会費とご寄付により賄われています。ご理解とご支持をお願いします。

【郵便振替口座】02740-5-19735
【名義】北海道ポーランド文化協会
※ 事務効率化のため、送金はできるだけ郵便局の ATM 扱い(手数料は無料)でお願いします。

〈連載俳句〉

ポーランド ＆ ニッポン歳時記

太陽へ向くヒマワリの偽善かな
(ヒマワリ―夏七月)

門火には大悪人の虚子も来る
(門火―秋八月)

出棺に閻魔蟋蟀飛び出すや
(コオロギ―秋九月)

千代麿

〈岩見沢市在住。霜田千代麿さん〉
1992 年より作句する。伝統俳句協会員。現代俳句協会員。北海道俳句協会選者。「夏至」同人。

ミントの香る家…

私たちの今年の夏は、ハーブの季節となりました。鉢植えのミントがその香りで心を和ませてくれています。周囲には、家庭菜園でハーブを栽培している人がいれば、ベランダや窓際で育てている人もいます。我が家では、例年のごとく、花も植えています。ハーブも美しさも奥が深いです。

wieczór po deszczu　ペチュニアの
cichą przestrzeń spowija　静かな甘み
słodycz petunia　雨の後

〈ポズナン市在住。津田モニカさん〉
日本文学研究者。2008 年から俳句を詠む。「日常の中の水彩画」のような句を目指す。

POLE
第 83 号 ポーレ編集委員会
氏間多伊子／尾形芳秀／栗原朋友子／越野剛／佐光伸一／ラファウ・ジェプカ

今後の活動予定

〈第 68 回例会〉朗読会
「午後のポエジア」

日時 ： 6 月 14 日(土)
午後 2 時(開演 30 分前)
場所 ： 北海道大学クラーク会館 3F
国際文化交流活動室

〈第 69 回特別例会〉(東京にて)講演会
「樺太時代に生きたポーランド人」

日時 ： 6 月 28 日(土)
午後 2 時～4 時
場所 ： 駐日ポーランド共和国大使館
(東京都目黒区三田 2-13-5)
講師 ： 尾形 芳秀 氏

※どちらも同封のフライヤーをご参照ください。

〈第 28 回〉定例総会

日時 ： 10 月中旬
場所 ： 検討中

ご寄付ありがとうございます

感謝をもってご芳名を掲載いたします。
栗原朋友子(4)
※( )内は口数:1 口千円、敬称略

会費納入のお願い

本年度も残すところ4ヵ月になりました。会費未納の方は至急納入をお願いします。

当協会の活動は皆様の会費で賄われています。引き続きご理解とご支持をよろしくお願いします。

【郵便振替口座】02740-5-19735
【名義】北海道ポーランド文化協会
※郵便局で ATM 扱いなら手数料は無料です

〈連載俳句〉

ポーランド & ニッポン歳時記

越中の薬屋くる日四月馬鹿
(季題―四月馬鹿)

帰る雁エロス・タナトス(死)海越えて
(季題―帰る雁)

春の沼鳥獣乱舞夜光杯
(季題―春の沼)

千代麿

〈岩見沢市在住。霜田千代麿さん〉
1992年より作句する。伝統俳句協会会員。現代俳句協会選者。北海道俳句協会選者。「夏至」同人。

祝祭日週間

ポーランドでは祝祭日期間が続いています。「神のいつくしみの主日」の祝日には、教皇ヨハネ・パウロ 2 世が聖人として宣言されました。「神のいつくしみの主日」は復活祭後の最初の日曜日で、ポーランドの修道女・聖ファウスティナのおかげで広まりました。「神のいつくしみの主日」からの 1 週間を、ポーランドのカトリック教会では「いつくしみの週間」として祝います。

さらに、今年はちょうどこの期間中に「職人・聖ヨセフ」の日と、5 月 3 日の「ポーランド女王・聖処女マリア」の祭日がありました。

また、5 月 3 日は「5 月 3 日憲法」の記念日でもあります。私たちの住む地区では、家々に国旗が掲げられ、私たちの建物もきれいに着飾っています。

złota forsycja 連翹(れんぎょう)の
pochylona nad płotem 塀に乗り出し
pilnuje domu 家守(やもり)かな

〈ポズナン市在住。津田モニカさん〉
幼いころから文学に親しみ、特に日本の文学に興味を覚える。俳句は4年前から詠みはじめる。

POLE 第 82 号 ポーレ編集委員会 氏間多伊子／尾形 芳秀／栗原朋友子
http://hokkaido-poland.com/ 佐光 伸一／ラファウ・ジェプカ

今後の活動予定

＜例会＞朗読会「午後のポエジア」＜予定＞

日時 ： 6 月 14 日(土)
午後 2 時(開演 30 分前)
場所 ： 未定

※ 出演者募集中(ポーランド関連の朗読)

＜例会＞ 講演会＜5 月開催予定＞

日時・場所 ： ただいま調整中

事務局の住所・電話番号が変わりました！

住所 〒006-0006 札幌市手稲区西宮の沢
6 条 1 丁目 16-1-210 佐光伸一気付
北海道ポーランド文化協会事務局
電話
FAX 011-215-6696

ご寄付ありがとうございます

感謝をもってご芳名を掲載いたします。

安藤 厚(7)	安藤むつみ(2)
氏間多伊子(2)	小笠原正明(4)
尾形芳秀(2)	小林暁子(3)
霜田千代麿(12)	霜田英麿(2)
髙橋健一郎(7)	富山信夫(2)
中島 洋(2)	三浦 洋(1)

※( )内は口数:1 口千円、五十音順、
敬称略、2013 年 9 月～2014 年 3 月

会費納入のお願い

4 月から本年度下半期に入ります。会費未納の方は至急納入をお願いします。
当協会の活動は皆様の会費で賄われています。引き続きご理解とご支持をよろしくお願いします。

【郵便振替口座】02740-5-19735
【名義】北海道ポーランド文化協会
※郵便局で ATM 扱いなら手数料無料

＜連載俳句＞

ポーランド & ニッポン歳時記

花杏昔王国幾山河
（花杏―晩春）

ポーランド大地ほろびず親仔馬
（仔馬―晩春）

陽炎や万羽はばたくヴィスワ河
（陽炎―三春）

千代麿

～「俳檀」3月号から転載～

＜岩見沢市在住。霜田千代麿さん＞

1992 年より作句する。伝統俳句協会員。現代俳句協会員。北海道俳句協会選者。「夏至」同人。

新年とともに「春の整頓」の時期が来ました。書類、ノート、写真の整理をします。思い出が湧いてきます。家を整えると心も整います。新しいリズムとともに、これから始まることの準備となるでしょう。

co za pogoda
nowy rok sypie śniegiem
i nadziejami

新年や
天から雪と
希望(のぞみ)降る

mróz rano chwycił
pozostawił po sobie
ślady na szybie

朝の窓
ガラスに咲いた
寒気かな

＜ポズナン市在住。津田モニカさん＞

幼いころから文学に親しみ、特に日本の文学に興味を覚える。俳句は4年前から詠みはじめる。

POLE
第 81 号 ポーレ編集委員会
http://hokkaido-poland.com/
氏間多伊子 栗原朋友子
佐光 伸一 ラファウ・ジェプカ

今後の活動予定

＜後援事業＞

W. ルトスワフスキ生誕 100 周年記念講演と演奏
ポーランド楽派を聴く～ショパンとルトスワフスキ～

日時：10 月 15 日（水）午後７時　開演
場所：札幌大谷大学百周年記念館同窓会ホール
お話：ズビグニェフ・スコヴロン
（ワルシャワ大学音楽学研究所教授）

※ 詳細は同封の「フライヤー」と「チケット（会員割引）」をご確認ください。

ブロニスワフ・ピウスツキ顕彰事業

＜記念碑除幕式＞

日時：10 月 19 日（土）時間未定
場所：アイヌ民族博物館（白老郡白老町）
※ 詳細は、事務局・佐光までお問い合わせください。

記念＜国際セミナー＞
日時：10 月 20 日（日）午前９時～午後５時
場所：北大学術交流会館 2F（札幌市北区北８西５）
「ポーランドのアイヌ研究者ピウスツキの仕事
-白老における記念碑の除幕に寄せて-」
※ 詳細は 2-3 ページをご覧ください。

＜第 27 回＞総会と懇親会

日時：11 月８日 午後６時（懇親会７時～予定）
場所：北大クラーク会館３Ｆ国際文化交流活動室
※ 詳細は 1 ページをご覧ください。

会費納入のお願い

2013 年 10 月から新しい年度がスタートします。同封の「会費納入のお願い」をお読みいただき、今後とも当協会へのご理解とご支持をよろしくお願いします。

【郵便振替口座】専用の用紙を同封しています。
02740-5-19735　北海道ポーランド文化協会

新入会員ご紹介

井上紘一さん、児玉忠征さん
どうぞよろしくお願いいたします。（事務局）

＜連載俳句＞

ポーランド & ニッポン歳時記

銀芒見てしまったのね輿の院
（芒－三秋）

アキアジと叫ぶ石狩河口にて
（秋味－三秋）

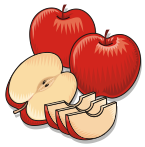
秋風をスカートに入れ母海見
（秋風－三秋）

千代麿

＜岩見沢市在住。霜田千代麿さん＞

1992 年より作句する。伝統俳句協会員。現代俳句協会員。北海道俳句協会選者。「夏至」同人。

林　檎



夏の終わり、そして秋の始まりです。果物を採ったり、冬に備えた瓶詰めを作ったりする時期となりました。今年は去年と違って、豊作ではありません。林檎が熟する前に腐ってしまうそうです。ただもう一つ、私が心配になったのは、熟する前に採られた物、つまり、その後いくら時間が経っても最早熟した果実のようにはならない物です。

高校生　熟する前に
もがれた林檎

licealiści
przedwcześnie zerwane
jabłka

＜ポズナン市在住。津田モニカさん＞

幼いころから文学に親しみ、特に日本の文学に興味を覚える。俳句は4年前から詠みはじめる。

POLE
第 80 号　ポーレ編集委員会
http://hokkaido-poland.com/
氏間多伊子　栗原朋友子
佐光 伸一　ラファウ・ジェプカ